眠れる竜に歌う花

葉鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眠れる竜に歌う花

【Ｎコード】
Ｎ０３６４Ｔ

【作者名】
葉鳥

【あらすじ】
それは水面下で敵対する両国の間に結ばれた婚姻だった。「君に掛かった術が解けて、私を好きになれば私の勝ち。そうならなければ君の勝ちだ」笑顔で心を押し隠しはぐらかす夫と、仮面の笑顔を取れば無表情の妻。お互いに牽制し合うが、相手に興味を持ち始めるのだった。

始まりの寂しさ

始まりはきっと寂しさだった。
あるいは、果てのない空間にただ唯一の存在であり続けることの恐怖だったのかもしれない。
誰か、何か、一つでも己の存在を認め支えてくれるならばと願ったのかもしれない。

＜全てのものに対を与えよう＞

欠けることなくお互いに引き合う存在は、この空虚な寂しさも満たすだろう。
始まりはそんな寂しさだった。

世界を対に迎えて、一つの歴史が動き始めた。

紡ぐ歴史の舞台はディルバ島。
世界の中心にして、魔力の中心。二つの国が存在する、ある意味完璧な対の島。
太陽の神を冠するブライトレット王国。
月の女神を冠するリヴァー神竜国。
神の在った時代を終えてなお、その世界は神の存在を知っている。
人の身には二つの流れが存在した。赤の流れ、すなわち血流。黒

の流れ、すなわち魔力。
神との契約を糧に魔力を行使する人々が居た。
人並みならぬ魔力を宿した身体、強靱な精神を有すれば神との契約も可能になるのだ。
そうした者達を人は魔術師と呼ぶ。

そして紡がれる歴史は、神が去り魔術士の生きる時代。
後に、「竜の眠る島」と謳われることになるディルバ島の大きな転機であった。

歴史の影

目も眩むほどの煌びやかな広い部屋の中、天蓋付きの寝台には紗の覆い布が引かれている。薄い布の向こうに見える人影は、か細くどこか頼りなさを漂わせていた。

「どう、したら……」

風に吹かれれば消えてしまうような声で、娘は無意識に呟いた。寒くもないのに自らの肩を抱き、深く項垂れた娘は、不安に押しつぶされまいと手に力を入れた。

怖い。逃げてしまいたい。でも、この道を選んだのは自分。

こんな時、どうすると決めていた？　そう、彼は助けてくれると言った。その言葉に甘えてしまうことになるが、最悪の事態は回避できるはずだ。

心を決め、毅然とした瞳で顔を上げると、顔に掛かった髪が揺れた。堅く閉じていたはずの窓がいつの間にか開き、室内に夜風が強く吹き込んで、天蓋から垂れた布を大きく揺らした。布越しに窓を見た娘は目を瞠った。窓辺に誰かが立っている。

「久しいな」

懐かしい声のような気がした。どこかで聞いたことがある、懐かしい声。

――久しぶり。

胸の裡（うち）にこみ上げた感情は波紋のように広がっていく。

――迎えに来てくれたの？

不安から解放される安堵、それ以上に、ここまでだったのかという落胆。そして間に合わなかったという絶望。

娘はまるで自分のものではないような、不可思議な感覚に捕らわれた。

「いや、違う。私の役目はまだ先だ。今宵はお前の意志を聞きに来ただけ」

――なら、間に合うのね。

「時間がないことに代わりはない。どうする？」

――最期まで、生きたい。幸せに生きて欲しい。だから行く。

「お前が生むものが何か解っていてもか」

ざわ、と心が揺れる。娘は自分であって自分でない意識を、別の誰かの中から見ているようだった。

懐かしい誰かは、口に出さない自分の声を正確に聞き取って応えている。

――私の証だもの。そして、？世界の調停者？は必然。どこかで生まれる運命、でしょう？

「運命論は嫌いだね。だが、盲目のフェニアも『必然』と視たようだ」

先見の二人に会ったのね、ともう一つの声が呟いた。

「決まったな。あいつを呼ぼう。……実は私は反対じゃないんだ」

微かに笑いを含んだ声は、彼本来の陽気さを見せていた。自分の中のもう一人が、彼に深く感謝をしていることがはっきりと分かる。娘にとっても、彼はまるで他人ではないように感じられる。

「あの人に、凄く迷惑を掛けてしまうけれど……」

初めてその意識が声に出た。二つの意識が、揺るぎながらも重なっていく。

「掛けておけ。あいつは気にしない」

晴れやかな彼の声は、不安を吹き飛ばしてくれる。

ではな、と言うと彼の気配が消えた。もう行ったのだろう。来たのも突然だが、去るのも突然の彼に苦笑したその時、いきなり頭の中に映像が飛び込んだ。

一面が乳白色の世界で私は佇んでいる。

『行くのか』

後ろから掛けられた声音は、深い寂寥感を滲ませていた。

『ごめんなさい』

申し訳ない気持ちで振り向く。でも、私が再びここに立つことは、

あなたも知っている。必ず戻ってくるわ、と頷いた私にあなたは、分かっている、と目で応えた。ごめんなさい、でも行かなくては。私が人間を知るために。

『私はいつでもお前のことを思うよ』

私たちは涙を流す必要など無いとしても、その優しさに涙が出そうになる。それを置いて行ってしまう自分は残酷なのだろう。

私もあなたを思う。たとえ、忘れてしまったとしても私はあなたを思っている。

ああ、そうだったのね。不意に鮮明な記憶が蘇った。大事なことを忘れていた。

だって、あなたは私の大切な――

映像が途切れ、意識は元の寝台の上に返ってくる。覆い布を押し広げ、素足を絨毯に降ろして音もなく歩き、窓辺へ立つ。娘は蒼い瞳の端に涙を浮かべながら両手を腹部に当てて重ね、微笑んだ。長い、灰色がかった銀髪が風に揺れた。

――ごめんね、大丈夫。もう迷わないから。

いずれ戻る日が確実に近付いているのだとしても。

その数日後、城内から一人の娘が消えた。

黒髪の魔術師

世界は創世暦千年を数えていた。
神去った時代でこそあれ、未だに魔術を扱う者達が神の存在を繋いでいた。
とは言え、何の制約も無しに魔術が扱えるはずはなく、魔術師たるには素養が必要だった。
魔術は自らの魔力を元手に契約した神との取引で成り立つ。
契約する神は一人の魔術師に一柱のみ。理論上は一柱に限るわけではないが、実際には魔術師が耐えられないことから自然と一柱に定められた。
境界の外側に存在する神と境界の内側にいる魔術師が、魔術師の望む境界の物質と魔力を交換する。これが魔術の基本だ。扱うにはその魔術が必要とするだけの余剰な魔力と、自らの魔力を制御する器用さが必要で、こればかりは先天的な才能なのか、いくら素養を積もうとも補えない。
魔術師になるには才能が要る。
一般の人間でも勉強すればランプに火ぐらいは灯せるようになる。しかしその勉強をするくらいなら、他の勉強をした方が遙かに有意義だというのが一般的な意見でもあった。魔術師学校に入ろうと思えば、全体の魔術師が少ないこともあって門戸が限られ、資金も必要である。在る程度の才能が見出されれば国からの援助で学校へ通うことが出来るが、見出されることなく生活する者達がほとんどだ。
大抵の魔術師は魔術師学校の出で、魔術師学校と言っても、生徒数の問題から一般的な学問科程とを併せた総合学校だ。
学校の他には弟子入りという手もあるが、これは時と場合、師との相性が大きく影響するのでなかなか難しい。
つまるところ、魔術師という存在は貴重なものであり、国として

も確実に雇用しておきたい存在だった。

ブライトレットという国は、地図に表せばその中心、四つの大陸に囲まれた海に浮かぶ一つの島に在る。その島の名をディルバ島と言い、北の半分にブライトレット国、南の半分にリヴァー国を有している。

ブライトレット国は希望に満ちているように見えた。

ほんの数年前には一部の地方による内乱で国が乱れもしたが、『王の影』と呼ばれる部隊の暗躍で無事鎮圧された。

今現在、王は善政を敷き民に支持され、特に孤児問題に力を入れて全国の孤児院を充実させている。王妃は既に亡く、現在国外に留学中の王子は少々気難しくあるようだが、皇太子として問題ない。

城内は人々の活気に溢れ、繊細な意匠で細工された壁や隅々まで丁寧に掃除された回廊、豊かさを誇るような城に国としての力もそれなりと思えた。

ブライトレット国の王都ベルタークに王城は在った。深い堀に囲まれた城壁の内側、城に連なり多くの建物が存在する。それらは全て城と一繋がりとなって、どこかしろ一部は城と接している。その中の一つ、城を正面から見て左手に位置する建築物の中庭に面した吹き抜けの渡り廊下を彼らは歩いていた。

「隊長！」

背後からの呼びかけに、その人物は静かに振り返った。

「何か用か」

凛と空気を振るわす声。振り返った動作に一歩遅れ、後頭部で一つに結い上げた夜色の髪が靡(なび)いた。真っ直ぐに射抜く瞳も冬の夜空の様にひどく静かだった。

対する人物はくすんだ灰黄色の髪で、長さが足りず結びきれなかった分はそのままに、ばらついた長さの髪を低く一つに結ってある。それでも背中の中程までの長さではあった。この甘さの残る顔立ちの青年は言いたいことがあるのに、何を言ったら良いか分からず口をまごつかせているようであり、事実そうなのだ。

「隊長……」

「クローム、何度も言わすな。隊長では紛らわしい」

口の端を少し上げ、隊長と呼ばれた人物は苦笑に近い表情を作った。そして再び歩き出したのをクロームは慌てて追った。

「ですが！　俺にとっての隊長はユイルス隊長だけですし……って、そうじゃなくて！！」

すれ違う人間が何事かと目線を上げるのに気付き、クロームは口を閉ざした。

前を歩くその人は自分より頭一つ小さく、実年齢ではそうではないが少年めいている。それはこの人物が『時の魔術師』の後継だからだという噂を聞いたが、真偽のほどは確かではない。この国では十六で成人だが、ユイルスはとっくに成人していた。

「そうじゃなくて……」
「聞いたんだな」
背中越しに聞こえた声は落ち着いていた。こんなに慌てている自分がおかしいみたいじゃないかと、クロームが一瞬思ってしまうほどに。
「……本当に、行くんですか」
ほとんど足音のしないユイルスの後ろを、カツカツと靴音を立てて付いて行きながらクロームは目の前でゆらゆらと左右に揺れる黒髪を見た。
とある噂を聞いたのだ。自分の直属の上官であるユイルス隊長が隣国に赴任するという噂を。
「行くよ」
特に感慨にひたるでもなく、淡々と告げられた。日差しの差し込むぎりぎりの場所から外れた所を真っ直ぐに、やや大股で歩く上官をクロームは追う。歩幅はクロームの方が大きく、追うのは苦ではなかったが、振り返らないユイルスがもどかしかった。
渡り廊下の途中でユイルスは中庭に出た。勿論、クロームもそれに続き上官の後ろ姿を視界の正面に入れる。
?風よ壁となれ?
その瞬間ピン、と空気が張ったのを肌で感じた。ユイルスが術で防音の壁を作ったのだ。こんな人目の付く場所で術を使えばすぐに分かるようなものだが、この人の使う術は繊細で気を付けなければそこに壁が在るとは気付かない。

ゆったりとユイルスは振り向いた。

「そうだ、私は行く。聞いたんだろう？」

「噂です！　姫様が、ご結婚される……とか。それで隊長が――」

「その通り。私が随行すると決まった」

今度こそ正面から向き合い、真っ直ぐな瞳とぶつかる。

言えば本人は嫌がるかもしれないけれど、綺麗な人だと思う。綺麗な顔立ちの者が多い魔術府の中で何故か目立たないが、この人は飛び抜けて綺麗だ。嘘のない真っ直ぐな目がそう思わせるのだろうか。

「帰って、これるんですか。リヴァーに行って貴方は……！」

「分からない。私が帰るとは考えない方が良い、とは思う。」

恐る恐る問いかけた疑問に返された答えは、あまりにも淡々としていた。

「隊長！！」

「良いんだ。これが陛下の決定ならば、私は従うのみ」

その執着のない物言いにクロームは地団駄を踏みたいくらいだった。どうにかしてこの人の関心を繋ぎ止めたいと思っても、叶わない。

「もしも……もしも、あの人が居たらあなたは行きませんでしたか」

自らのことだというのに、常と同じく淡泊な態度の上官が何よりもどかしく感じ、クロームはふと浮かんだ考えをそのまま口にしてしまった。よく考えれば、言ったことを必ず後悔すると分かってい

たというのに。
ユイルスは笑った。痛みを鎮めた昏い瞳で薄く微笑んだ。
「憶測は憶測にしかならない。あいつはもう、居ないのだから」
腰に回した剣帯に差した二振りの中型の剣に触れ、目を伏せた。
微かに動いた唇が音のない言葉を紡ぐが、クロームには何と言ったか分からなかった。
「今までお前が私を支えてくれたこと、感謝している」
続いた言葉は別れの文句だった。
「今までなんて……。これからも貴方の副官でいたいのに」
我ながら情けない声だとは思ったが、意識したところで治りはしなかった。ユイルスの薄い笑みは苦笑に近くなる。
「お人好しで素直。お前の良いところだが？ここ？では気を付けた方が良い」
「っ、はい！」
「第五分隊を頼む。お前なら大丈夫だ」
「はいっ……！」
ぱん、と一つ腕を軽く叩かれれば自然とクロームに気合いが入った。それでもやるせなさは消えなかったし、隊長が帰らないという不安も消えていない。何よりユイルス自身のことが気掛かりだった。
「では、姫様は」
「あれは弱いから――……困るな」

ユイルスは右手でぐしゃりと前髪をかき上げた。腕の影から見える表情は微かに苦悩しているようだった。

「私は苦手だ。どこか違和感がある」

「美人、ですよね」

「……私は美醜に拘らないから」

ふっと息をつき、「この話は終わりだ」と言って、張り詰めた空気を乱す。軽く指を降るだけで風の壁は崩れ去った。

「出立が決まったら教えてください」

「本当は秘密なんだがな」

肩を竦めた上官に笑い、クロームがふっと目線を逸らした渡り廊下の内側に、こちらを見る人間が居た。金色の髪を綺麗に結い上げた簡素なドレスの少女だ。その渡り廊下の先には魔術府の宿所しかなく、その少女に見覚えのないクロームは自然と見つめてしまった。棘のある鋭い視線に疑問を持ち、危ぶみかけた時、ユイルスが「あの娘は」と呟くのが聞こえた。

「知り合いですか？」

「そう、なるかな」

要領を得ない答えに振り返ると、ユイルスは真っ直ぐに少女と視線を交わしていた。睨み合う、と言っても良いほどだが、ただ静かにその視線は外された。一つ礼をして、少女は歩き去ってしまった。

決別の宣告

ブライトレット王との対面というものは、昔から一種の緊張感を伴っていた。
それは世間一般的な恐れ多いという感情ではなく、セピアにとって微妙なものであった。
父と言うには遠く、大きな存在としてセピアの中に植え付けられているその人は、今までもこれからも気安い関係には成り得ないと理解している。
王の私的な居住区にある部屋での対談に少しばかりの居心地悪さを感じ、セピアはドレスの裾の皺を気にして撫でつけた。

「……では、良いな」
「承知致しました」

厳かな声音は生来のものなのか、それとも王として後天的に身につけたものなのかは分からない。けれど、セピアの身を引き締めるには充分すぎるものだった。
痩躯ではないが屈強なわけでもないのに、威圧を与える居住まいは厳しい。
セピアは無礼と承知で目の前の男の顔を眺めた。親子なのだから似ているところを探せば見つかるだろうと模索するが、自分では良く解らない。髪の色はブライトレット王家に多く見られる金髪ではないし、瞳の色も父とは違う。強いて言えば、つり気味の目は父譲りのものだろうか。母は自分より穏やかな顔付きだったと記憶している。
共通点と言うならば、セピアの表情は王と同様に固く微動だにし

ない。セピアはこの父王が表情を露わにしている所を見たことがない。自分にも昔は少なからず、感情の機微を周囲に伝えるだけの表情の変化は有ったはずだが、今となっては昔の話だ。
王の為に出来ることをしようと決意したのは数年前で、十九年生きてきた中で考えれば最近のことだろうか。どうしてなのかは自分でも分からない。王が自分を娘だと考えているのか、ただの使い道のある駒として考えているのかセピアには知りようのないことで。どちらにしろ、この王のために働くのだろう。
今もこうして命じられるままに動く自分がいる。

「この者を付ける」

視線だけを動かして、王は背後に控えるその存在を示した。
私的に――私的と言うにはあんまりな会話だったが――機密事項を交えた話をしていたというのに、王が退出させなかったことに最初から何かあるのだとは気付いていた。
彼女は城の侍女服を身につけているのだから侍女なのだろうが、ピンと張った背筋と油断のない空気から、何か武術の心得でもあるのだろうと予測できる。甘くない生真面目な顔つきの、背の高い娘だった。
今までセピアはこの侍女を見たことがなかったが、自分の城内での活動範囲を思えば不思議ではない。

「アーリとお呼びください。よろしくお願い致します、セピア様」

アーリは綺麗に礼をした。声音も低めで、しかし耳障りではない。むしろ、城下の娘達がこぞって騒ぎ立てそうな凛々しさを持っている。彼女の配色はブライトレット人らしい薄い金髪と橙色の暖色で、セピアよりブライトレット王との相似点がある。

「よろしく」

ふとアーリに妙な既視感を感じて、伏せた双眸を見つめた。どこかでこの娘を見たような気がしたのだ。

（いつだったろう、あれはまだ――）

「セピア・サディシラ・ブライトレット」

セピアの思考は無機質な声に遮られた。

呼ばれれば反射的に肩が揺れる。全ての名を誰かに呼ばれることはそうそうない。人の名は魔術的意味を持ち、古代ではその人の名を知れば、意のままに操ることさえ可能だったと言う。よって今でも王侯貴族の名は長く、普段は縮めた形で呼ぶのが習わしであり、相手に本来の名を知らすのは余程の信頼関係にある場合だけだ。

王にそういった心がないとしても、セピアは名を呼ばれることに迷信じみた脅威を感じる。例え呼ばれたのが略名で、呼んだのが父王だとしても。しかしセピアは父であるからこそ、恐れるのかもしれない。

「ヴェルディグリ王家の名を背負いセピア・ヴェルディグリと改めよ」

「……拝命いたしました」

呼ばれ慣れない、その名を呼ぶ日が来たのだ。

女性は結婚すれば大抵、相手方の名を名乗る。その際、平民以上の者は自分の名前以降、総入れ替えになるのだ。王族女性のセピアを例にすれば、名前・母方の家名・国名で構成されている名が、結婚後なら、名前・実家の家名・相手の国名となる。

そして今宣言された名は、母方の家名から父方の家名に代わったもので。

「不備の無いよう、役目を果たせ」
「御意のままに」
何の感慨も抱かないその声が、静かにセピアに決別を告げた。

ブライトレット国の王都ベルターク。
様々な商店や露店が立ち並び、人通りも多く賑わう表通りから少し外れた日の陰る裏道。それは建築物と建築物の間に出来た隙間かとも思うような道であり、大人二人が斜めになってやっと並んで歩けるほどの道幅だ。人通りはほとんど無く一種の抜け道と化している。さらに言えば、真っ当な職業に就かない者や警吏に見つかりたくない者達が好んで通る道だった。
複雑に入り組んだ裏道は無人だが、表通りからするり自然な動作で入り込んだ者がいた。黒い上着のフードを顔の半ばまで降ろし、ふくらはぎまである裾を翻した人影だ。
その足取りに迷いはなく、どこか優雅ささえ感じる。編上げ靴の底は音を消す素材でも使っているのか靴音がない。遠目に見たら黒い影がふわふわと移動しているかのようだ。
真っ直ぐに進み、時に曲がり、全く迷う風でもなく歩みは進む。しかしフードの人影はある左への曲がり角で足を止めた。
一呼吸遅れて黒い裾がふわりと元の位置に戻った。振り返れば今までの道はしばらく一本道が続き、正面は行き止まりの壁で進むに

は左手へ曲がるしかない。黒いフードが何か考えるように小首を傾げると、はらりと一筋の黒髪がこぼれ落ちた。
そして何気なく右手を身体の横へ伸ばし、壁に触れる。フードに隠れていない唇の端が微かに笑みの形を作った。

「見つけた」

そのまま力を入れずに手のひらを押しつけると、壁はぐにゃりと捻じ曲がり半透明に透けた。人影は透ける壁に真正面から対峙すると、臆すことなく近付き壁を通り抜けた。
振り向くとそれはただの壁になっており、人影は苦笑するように肩を竦めると、壁の内側に現れた正面の建物へ向き直る。

？エル・バレン魔術商店？

そう書かれた看板は何故か黒く煤けていた。

「失礼する」

カランカランと響くドアベルは明るく、表通りの店と何ら変わらないような気がした。
店内は明るい、とは言い難く、まだ日が高いというのに遮光性の布で窓をきっちりと覆い、店内はランプの光で仄かに照らされている。

「おう、久しいな」

カウンターには組んだ手の上に顎を乗せた男がにやにやと笑っていた。人によれば嫌な感じの笑みに取られるが、その男のにやけ具合は意図が有ってのものではなく生来のだった。

黒いフードがぐるりと店内を見回した。布を広げた机の上に所狭しと品物が並べられ、壁には色々と釘で打ち付けられているが、見上げれば天井からさえ何か紐で吊り下げられている。しかし何処かいつもと違うような違和感を感じ、「あの看板は」と思い出したように口にする。

「そう！　見たか、表のあれ。酷いもんだったろ」

「あの看板、この店が移動していたことと何か関係があるのか？」

気に入っていたのになぁ、と口惜しそうな男にそう尋ねた。

裏道をいつものように歩いていたが、所定の位置に店が見当たらない。引っ越したのかと次の出店場所を捜索していたのが、さっきまでのことだ。新しく張られた以前より巧妙な結界に少々驚き、辿り着いた先の看板は変に煤けている。何かあると思うのが当然の流れだ。

「前の場所で店やってた時、王城派と学院派が鉢合わせしてさぁー。それが運悪く両者共にちょっと血の気多くて、店の前でドカン」

「……災難な事だな」

王城派魔術師と学院派魔術師との不仲は有名な話で、二年程前には魔術師間で名の知れた事件が起きたこともある。一人の男が身を持って納めた一連の事件を？ディーゲの雨？と言い、それを境に両者の対立は静かに収まりつつあった。しかし、それでもふとした拍子に小さな諍いが起きたりするのが現状だ。

しかしながらその諍いに魔術が用いられるのは希なことで、もしかするとこの店の前が初めてだったのかもしれない。魔術師の規約では、無闇に人を巻き込む大きな術を使うことを禁止している。破ればそれなりの罰則が付くこともあり、破ろうと思って破るものではない。

そして？エル・バレン魔術商店？は場所からも分かるとおり、正規の店ではない。警吏の兵を呼ぼうにも、現場はその店先。どちらにしろ苦渋の選択で、大事にしたくないのは全員一致の意見だろう。示談で済ませることになったのは目に見えている。

この店が巻き込まれたのは、不運としか言いようがなかった。

「おかげで改装しなくちゃならねえし、ついでに引っ越して結界も変えてみた。どうだ？」

「良いんじゃないか。心得のない者には到底見つからない」

そう請け負うと男は途端に機嫌良く、いつものにやにや笑いを顔一面に広げた。

「そうかそうか！　あんたがそう言ってくれるなら間違いないだろ」

男の物言いに「高く買ってくれたものだ」と溜息をつくと、袖口から小さく折り畳んだ紙を取り出す。それを手渡された男は億劫そうに立ち上がり、カウンターの奥の棚をガサゴソと探り出した。抱えるほどの箱を降ろし、中を選り分け始める。

「はいよ。いつものやつな」

「助かる」

差し出された紙包みの中身を確認し、懐から財布を出すと数枚の紙幣と小銭を選んで机上に置く。男はそれを数えながら

「なぁ、城勤めのあんたなら知ってるか？」

他に誰も聞いてはいないのに、声を低くして囁くように話した。

「今度さあ、あの姫様、隣りの王様と結婚するんだろ？　？隠し姫？っていう王の秘蔵っ子」
「ひぞ……さすが情報が早いな」
一瞬フードの下で妙な顔をした客には気付かず、男は得心して「やっぱそうなのか」と何度も頷く。
「で、何なんだよ。おかしいよな最近のこの国はさ。俺達ずっと王様の子供は王子一人だと思ってたんだぜ？　それが、王妃様が亡くなって十年経つ今頃になって、庶出でない姫まで居ましたなんて何つーか……」
男は一瞬間を置き、さらに声を潜める。
「都合良すぎるよな」
王妃が亡くなって十二年、王子が生まれて今年で十六年。ブライトレット国で数ヶ月前に王から公開された情報があった。
『王妃は王子を産む前に姫を産んでいる』
その言葉は瞬く間に国中を巡り、隣国へも届いた。そしてここに来ての婚約だ。少々穿(うが)った見方をしても仕方ない。
そもそも、姫の存在を隠していた意味も解らない。件(くだん)の姫は人前には出ない。王妃の面影を感じる似姿は公表されたが、それが正しいのかは不明だ。
男は王と？隠し姫？との血縁、つまり？隠し姫？が正当な姫であるかを疑っている。もし血縁など無い赤の他人を隣国の王へ送りつけて、正体が知れたら問題どころではない。それを理由に戦争にまで発展するかもしれない。
それを危惧するほど両国の関係は危うい。

「安心しろ、お前が心配するほどのことではない。似合わん真似をするな」
「ひでえなあ。ま、その通りだけど」
男は顎をさすりながら苦笑した。
「――ではな。あまり吹聴して不敬罪で捕まるなよ」
「心得てるよ」
再びこの店には不釣り合いなドアベルの明るい音が響く。
店から出ると、自然の太陽光の明るさが降りてくる。上を見上げれば高い壁の隙間から、細長く切り取られた空が見えた。
男が思うようなことは隣国の人間も重々承知なのだ。リヴァー国がそれを敢えて受けた時から、最早引き返せはしない。戦はある意味もう始まっている。婚約が成立したその瞬間から。

隣国へ辿る道

隣国への道中は、一国の姫である花嫁の馬車にしては、いささか質素すぎると言っても足りないほどであった。

それもそのはずで、セピア・ヴェルディグリ・ブライトレットがリヴァー国に行く日程は一般には伏せられている。出立など、人目に付かない深夜近くとなったほどだ。様々な思惑の末そう決まったが、花嫁を乗せた馬車は華やかな装飾には程遠く、動きやすさをひたすら重視した造りの物だった。

しかし、その馬車に乗り込んだ当の本人は、その事について全く気にしていないことを同乗者は知っていた。

馬車の主であるセピアは、ブライトレットの城で密かに馬車に乗ったその時の姿勢をほぼ崩さず、窓の外を見ているようだった。セピアから斜め前の席に向かい合う形で座っているのは、唯一の同行者である侍女のアーリだけ。セピアは多くの例外的な決定に不満を言うわけでもなく、淡々と王の指示に従う。事実、不満になど思っていないのだから。

窓に映る夜景がどんどん後ろへと流れ、途中浅く微睡み、空が白み始めた頃、御者が国境近いことを告げた。

人通りがない夜中だったとは言え、驚異的な速さの進行だ。馬車には何らかの術が仕掛けてあることは容易に想像できた。アーリには術のことは解らないが、博識なセピアなら何か知っているかもしれない。出立の準備中も、しげしげと馬車の一部を眺めていたのをアーリは思い出した。あの時は、やはりこの馬車が気に入らないのだろうかと思っていただけだったのだが。

馬車の中、口数のさして多くない者同士が二人きりになれば、必然と沈黙が広がる。そして二人揃って沈黙を気にするような人間ではなく、用がなければ会話は生まれないのだった。

これまでに一度、アーリはセピアに、この出立に不満はないのか問いかけたことがある。答えは簡潔だった。「術を使ってるのね。速さは出るし、頑丈な馬車……居心地も悪くない。文句はないわ」と。

セピアは神妙そうな顔付きでそう答え、誰にも祝われない隠れるような出立も、たった一人の侍女にも文句を言わない。全くの規格外の姫だったが、さすがに服装は今までアーリが見た中で一番良い物を着ている。リヴァー国にブライトレット国の威信を示すためだとか、そんな理由だろうと推測できた。服装一つで舐められるわけにはいかない。国の代表たるセピアは、気の毒なことに国をかけて着飾らされる羽目になっていた。

セピアの静かながら断固とした反対により、派手なものや華美なものは却下されたが、装飾は抑えたが、細かい箇所にも意匠を凝らしたドレスは、控えめでありながら華やかだった。同じく派手でない小振りの装飾品は最低限のもので、逆にセピアの凛とした顔立ちを引き立てている。

それにアーリは、髪が綺麗に結い上げられているセピアを初めて見たのだった。

正直、窮屈な行程だと思った。

普段ならば無造作に一つにくくるか、風に靡(なび)くままの長い髪。それが、複雑に装飾品を絡めつつ結い上げられ、これでは背もたれにも満足に寄り掛かれない。セピアは三面鏡で見せられた己の後頭部

の様子を思い出し、楽な姿勢を取ることを諦めた。
狭いとは言わないが、広くない密室に親しいわけでもない人間と二人きり。しかも、新しく付けられた侍女である彼女は、親しいどころか初対面に近い。どことなく居心地の悪さを感じるようなものだが、セピアは頓着せず馬車生活を送っているのだった。
その、ほぼ初対面である二人には会話がほとんどと言って良いほど無く、見る者が見れば、二人の仲の悪さを疑ったかもしれないほどだ。それは険悪な仲よりは仲が良い方が良いに決まっているが、まともな会話がない。会話もないのに険悪にはなりようがない。
同年代の同性達に比べ、無口な方に分類されるであろうセピアは、会話のない空間を率先して作る方ではあったが、必要な事柄に言葉を惜しんでいないつもりだ。しかし、自分の知りたい情報をアーリから聞き出す努力をしてみようかとも思えど、無駄だろうと見当を付け、既に諦めている。アーリはこちらに必要な情報しか話さないだろうし、必要なことは王の口から聞いている。自分に必要な情報は全て提示された、これ以上は与られない。ブライトレット国王とはそういう人だ。
自分の役割が彼にとって、どのようなことをもたらすのかセピアは知らない。そして教えられることはない。多分、これからもずっと。

平坦だった道が山道に変わり目まぐるしく移り変わる景色、その多くを緑が埋めるようになった頃、淡々と窓の外を眺めていたセピアは生国を離れていくことを実感していた。
セピアはセピアなりに父王に尽くそうとしている。母は小さな頃に既に他界し、弟とはまともに顔を合わせたこともない。会ってみたいと思ったこともあったが、向こうは会いたくないのかもしれない。城内を自由に歩ける彼は、閉じこめられた自分に一度も会いに来たことはなく、それは会う意志など無いという表れのようだ。それを思えば、そこまで積極的に会う意思のない自分から「会いたい」

などとは、とても思えなかった。ついに一度もきちんと顔を会わさないまま国を出ることになったが、彼は他国へ遊学に出ている。仕方のないことなのかもしれない。いつか遠目に見た未だ少年の域を抜けない弟の、ぴんと背筋を伸ばした後ろ姿は父に似ていた。

ブライトレット国王の親の顔をセピアは見たことがない。それがセピアだけにそうなのか、弟にも同じなのかは解らないが、ともかくセピアにとって彼は父としては全く親しめない人ではあったが、仕えるべき王なのだった。

子供の頃に会ったのは数回。当時は何の感情も湧かず、ただ？父？という人だとは理解した。

今でさえ、生涯の別れかもしれないのに？父？に対して情緒を伴った気持ちは抱かない。ただ、自分に課せられた『仕事』をするだけ。それが？父？に自分が出来る数少ない事なのなら、自分を惜しまない。一般的な親子としてはおかしいのだろうが、他にどうして良いのか分からないのだ。

風のない水面のようにセピアの心は静かで動かない。

泣きながらすがり、我が侭を言ったあの日から、セピアの心は静まり返って感情に波を立てることはない。

どこまでも優しかったあの人に『心が死ぬほど辛いなら、どうかいっそ凍らせて』と頼んだあの日から。

「国境を越えたようです」

ぽつりとアーリが言葉をこぼした。

ブライトレット国とリヴァー国は、ディルバ島の中心に横たわるトウダミア山脈で二つに区切られている。越えられないほど高い山ではないが、魔物が多く住むと言われ、確実に安全な山道を選ぶとそれは今通っているギーズ山道に限られてくる。

意識してみれば、馬車は下りに差し掛かっている。国境は大体ギーズ山道の頂点辺りとされているから、ここは最早リヴァー国内だ

った。
「ついに来た……か」
扇を握る手に心なしか力が籠もる。ふとそれに気付き、不安なのだろうかと自問する。この動かない心に基づく感性など、てんで当てにならないとセピアは自答する。最近、そうして自分が分からなくなることが多々あることを思い出し、セピアはそっと目を伏せた。
（おかしい原因は分かってる。でも、まだ保たせないと……これが終わるまでは、まだ）
力が入り、軋んだ扇を、アーリが微かに眉を寄せて見ていることにセピアは気付かなかった。
どれ程の時間が経っただろうか。
セピアもアーリも、目を閉じて一言も発しないまま馬車は進んでいる。二人は共に眠ったように動かないが、ただ身体を休めているだけだった。道中、何が起こるかわからないのだ。安心はできない。
幾分ゆったりとした気分でいたセピアだが、緩やかに何かの気配を察知した。
（これ、は……まさか、ルグル？）
馬車は徐々にその気配に近づいている。セピアは気配を探ろうと全身を集中させた。
まさか、そんなはずはない。こんな所にこの気配が在るはずはない。驚きと困惑と疑問が胸中でない交ぜになって溢れ出した。しかし、セピアはこれによく似た気配を知っていた。
「セピア様？」
セピアの様子が変化に気付いたアーリは、訝しげにセピアの顔を覗き込んだが、その行為はおそらく何の収穫もないだろうことはセピアにも分かった。セピアの顔は恐ろしく変化に乏しいと自他共に認めている。
「……止めて」
「は？」
「馬車を止めて、早く」

そう言うと、アーリが御者に掛け合うのも待たず、セピアは馬車の扉を開け放った。瞬時に風が馬車内へ舞い込み、ドレスの裾を煽ったが、誰も気にしなかった。それどころではなかったのだ。

「セピア様！」

アーリの強い制止の声をセピアは背中で聞いた。アーリが手を伸ばすよりも早く、あろうことか、セピアは疾走する馬車から飛び出した。

転がるような着地ではなく、とん、と軽やかに草むらに降り立ったセピアは準備よく裸足だった。今さっきまで履いていた華奢な靴ではこうはいかなかっただろう。しかしながら、靴の分を差し引いてもセピアの動きは尋常ではなかった。

「すぐ戻るから、そこにいて」

慌てて止まった馬車から身を乗り出しているアーリに声を掛け、セピアは身を翻(ひるがえ)して駆けだした。

はっきり言って、ドレスの上に外套を重ねているこの格好はとても動きにくい。惜しげなく布地を使った裾が足に絡みつくが、ドレスに走りやすさを求めた人間は未だかつていないだろう。文句は言えない。

（どうして、こんな所に――？）

視線を左右に探るように動かしながら、セピアは感覚が告げる方向に迷いなく向かう。

馬車に乗っている間、妙な気配を感じていた。それは進めば進むほど強くなり、セピアは、その気配を探るべく馬車を飛び降りたのだ。アーリは気付いていないようだったが、それはそうだろう。気配に敏感な人間でも注意しなければ気付かない程度の感覚だ。セピアは気配に敏感どころではない体質を持ち、それもある種の才能だった。

今感じる気配は、自分の知っているものに少し似ている。肌に触れる空気は、あてられる程に濃く魔力を帯びていた。

セピアはある程度近づいたと確信すると、目を閉じて胸一杯に空気を吸い込んだ。

美しい森、澄んだ空気、そして混じるのはあの妙な気配。
「魔力の、流れが……いや、【魔力の場】？」
魔力の場とは魔術師が術を使う際に用意するものだ。術とは自分の魔力と引き替えに別の世界から何かを召喚することであり、虚空から何かが出現することはあり得ない。その何かは使う術によって変化する。例えば火の術を使うとする。自分の魔力を差し出し、代わりに火を得ることが出来るという等価交換が基本になる。しかし、その前に必ず踏まなければならない手順がある。

それは魔力の場を作ること。

川で釣ってきた魚を、いきなり海水に入れたらどうなるだろうか。つまり別世界の物質を、いきなりこちらの世界の空気に触れさせるのを防ぐことを目的としている。
術は魔力の中でしか生きない。魚を生かすためには、魚に合った水を用意しなければならない。だから魔術師は魔力の場を作る。魔力とは別世界の物質を縛り付けておく鎖でもあるのだ。鎖が切れれば縛り付けられていたモノは霧散して逃げるだろう。

では、何故ここに魔力の場が存在しているのだろうか。
不審そうに眉をひそめ、セピアはくん、と匂いをかいだ。随分と濃密な力の匂い。吸い込んだ空気に含まれた魔力は体中を巡り、頭がくらくらするほどの力を持っていることが分かる。何故か不思議な高揚感に満たされていく。まるで酒に酔ったような。
だんだんと濃くなる空気に目的地が近いことを悟る。明らかに空気の流れが違う。
（魔術師が居るかもしれない）
目立つ銀髪を隠すために外套のフードを被ると、静かな足取りで進み、油断無く辺りを窺いながら現場に向かった。
基本的に【魔力の場】は、魔術を行使する前準備に魔術師が作為

的に発生させるものだ。魔術師が居るかもしれないと疑うのは当然のことだった。

セピア達は内密での入国だが、もし反ブライトレット国派のリヴァー国貴族がその情報を掴んでいたら？

表向きは両国の和平を結ぶ、という謳い文句の婚姻も穿（うが）った見方をすればただの陰謀だ。ただでさえ両国の上層部は険悪だ。疑惑の固まりのセピアを迎え入れて嬉しいはずもなく、妨害するだろう。

だとすれば最早決まってしまったことだというのに、往生際が悪い。婚姻が決まる前に妨害すれば良いことではないか、と思ったがセピアは考えを反転させる。

？あの？ブライトレット王と？変わり者？と名高いリヴァー王が決めたことだ。恐らくさっさと決めて要領良く事を運んだのだろう。妨害は容易くなく、決定が覆るものでもない。一応は娘であり、当事者のセピアでさえ、内々にだが確実に婚姻が決まるまで知らされなかったのだ。

軽く頭を振って、セピアはその考えを脳内から追い払う。今は、現状把握が先決だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0364t/

眠れる竜に歌う花

2011年8月6日14時49分発行